

# 肺がんの分子標的治療

やまなし

## 医療最前線

県立中央病院から

《 47 》

全国のがん患者の死亡のなかで男性1位、女性2位となっている肺がん。早期発見し手術を受けることが治療への王道だが、手術ができない進行がんの克服に向けた手段として有効なのが分子標的治療だ。がん細胞の特徴を調べ、特定の分子を狙い撃ちする新しい肺がん治療に県立中央病院も取り組んでいる。

分子標的治療は細胞内の特定分子だけをピンポイントで攻撃する。下痢、ニキビ、肺炎などの副作用が知られているが、有効性の高い症例を選択できるようになり、適切に



宮下 義啓  
呼吸器内科科長

## ピンポイントで狙い撃ち

使用されるようになった。現在、肺がんに使われる治療薬にはEGFRチロシンキナーゼ阻害薬と、ALKチロシンキナーゼ阻害薬がある。

呼吸器内科科長の宮下義啓医師によると、治療の対象となるのは手術で切除不可能な進行がん。治療前には、がん細胞を採取して細胞の種類や遺伝子の型などを調べ、「薬が効きやすいかどうか」を確かめる必要がある。EGFR遺伝子変異がみられる患者に

は治療効果が高いが、遺伝子変異のない症例では有効性が少ないとされる。同病院の肺腺がん症例のうち、変異陽性例は40%だった。

肺がん患者は全国で増加傾向にあり、山梨県でもこの20年間で男女ともに約2倍に増加している。2008年度の県がん登録によると、70歳以上が3分の2を占め、患者の多くは高齢者という。

同病院の肺がん患者は年間延べ120〜130人で、このうち腺がんが60%と最も多く、次いで扁平上皮がん20%、小細胞がん9%程度となっている。08〜11年の447例のうち男性が72%、女性が28%で、全体の平均年齢は70・8歳だった。

宮下医師は「従来の抗がん剤治療ができない高齢者でも、分子標的治療ではがん細胞の特徴を調べ、一人一人に適した治療を行うことができる。患者さんにとっては生活の質が上がる」と話している。

第2、4木曜日に掲載します

山梨県の気管・肺がん  
死亡者数推移(人)

※人口動態統計から

